
ガム

あさぎ 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガム

【Nコード】

N7347N

【作者名】

あさぎ 翠

【あらすじ】

「おやつシリーズ」の番外編

怪盗は予定通りの逃走経路を中継地点へ向けて飛行していた。予想通りの警備に中森警部の行動、宝石も予想通り目的の物ではなくて、何もかもが想定内でツマラナイ。唯一期待はずれだったのが今夜は探偵が中継地点へ現れないかもしれないという事。仕事前、警察無線を傍受した際に、某複合都市のビル内で殺人事件が起こりそこに毛利小五郎が居合わせていると小耳に挟んだ。という事は必然的に小さな名探偵もその場で事件解決に奔走しているはずだから、きつと今日が予告日であったことなど忘れているだろう。それでも怪盗は密かに楽しみにしていた夜食を諦めきれず、もしかすると事件はとつくに解決してるかもしれないと、再度警察無線を傍受することにした。

『逃走中の犯人を確認しました。現在、うわっ！』

『どうした！』

『すみません。スケボーに乗った少年と接触しそうになりました』

『それで、犯人はどこへ向かった』

『はっ、申し訳ありません！見失いました！』

ブツ

ダメじゃん、名探偵。警察の邪魔しちゃ・・・

怪盗は溜息を一つこぼし無線機を胸のポケットに仕舞った。探偵が邪魔なのか警察が邪魔なのか、結果論で言えば後者なのかもしれないが警察のお仕事の邪魔はいけなだろう。怪盗は少しだけ好奇心が沸いてきた。探偵が犯人を追い詰める様を見学してやろう。ついでに必要とあれば手助けして貸しを作るのもいいかもしれない。怪盗は目的地を変更する事にした。中継地点の目と鼻の先にある探偵がいるビルへ。

*
*
*
*
*

まづつたなあ。

探偵は屋上の縁へ追いつめられたいた。

まあ、ちよつと、いろいろあつて犯人に銃を突きつけられてしまつてゐるのだが、探偵は銃を向けられるような事をした覚えはない。ちよつと蹴倒して犯人の拘束から逃れただけだ。だが、それでも犯人には十分だつたのだらう。もしかすると銃を持ったことで興奮状態にあるのかもしれない。

「お前はもう囲まれている。大人しく銃を捨てて投降しなさい」

目暮警部の声が響き渡る。側には佐藤に高木、蘭、それから小五郎の姿も見えた。

「これが見えねえのか？そこから一步でも近付けば、あのガキがどうなつても知らねえぞ？」

犯人は笑いながら探偵に銃を向け一歩ずつ近付いてきた。もちろん目は警官達へ向けている。人質が居る限り警察は下手な身動きは取れない。要するに自分が邪魔なのだ。犯人と探偵との距離はおよ

そ10メートル。探偵は腕時計のライトを点灯し犯人の背後から空へと向けた。ここに居る人間には絶対に気付かない探偵の賭け。あと数歩で犯人が探偵にたどり着くだろうというところで探偵はつぶやいた。

「本当に時間通りなヤツだな」

探偵は背後にある幅のあるフェンスによじ登り右手を大きく振り上げる。そして走り出すと戸惑うことなくビルから飛び降りた。

直後に通過する白い影。

犯人の手には銃の代わりにトランプが刺さっていた。

怪盗は光が見えた瞬間から何か嫌な予感がしていた。探偵が居るはずのビルの方角から届く光、近付いてみれば探偵が銃を突きつけられて警察も手が出せないという状況。怪盗は考える間もなくトランプ銃を取り出し、犯人に向けて狙いを定めた。だが探偵の行動がおかしい。右手を振り上げフェンスの上を駆け出すではないか。

「あんの、バカ！」

怪盗は悪態をついてトランプ銃を発射させるとすぐさま探偵の後を追ったが、手が届く一瞬前に探偵が床を蹴った。急いで垂直降下する。そして探偵の伸ばされた右腕をしっかりと掴むとハンングライダーを水平に戻した。その際、掴んだ腕に相当の負荷が掛かったが、探偵の様子を伺うととりあえずは大丈夫そうだった。怪盗は着地点

を求めビルの外周を飛行する。どうせ探偵は戻らなければならぬのだから同じビルがいいだろう。怪盗は条件に見合った場所を見つけると探偵を引き上げて小脇に抱えて着地した。

「さあ、説明してもらおうか」

怪盗は顔に『怒っています』という表情をありありと浮かべて探偵に詰め寄った。

「えっと・・・あの・・・その・・・エヘヘッ」

「エヘヘじゃない！」

はぁ・・・、耐えろ俺。怪盗は額に手を当てて目を閉じて落ち着くよう努力した。そして改めて探偵を見ると、あちこち擦り傷だらけである。怪盗は何処からともなく救急セットを取り出すと、探偵を座らせて黙って傷の手当を始めた。探偵はバツが悪くなって、都合の悪いところを省き、更に掻い摘んで今回の顛末を話し始める。逃げた犯人を追いかけたら突然銃を向けられて、人質が居ると警察も手を出しづらいだろ？そこでお前の逃走経路がこの辺だった事を思い出して、これは渡りに船かなあ、と。

怪盗は米神がびくびくと脈動するのを感じた。

「あのなあ、俺に助けを求めるのも、利用するのも別にいい。出来ることはしてやるさ。でもな、命を粗末にするようなマネは止めてくれよ。手が届いたから良かったものの、もしオレが間に合わなかったらお前は地面に叩きつけられてたんだぞ？死ぬんだぞ」

「死ななかつたんだからいいじゃねえか」

「ああ？」

「だから実際は手が届いたし、俺は生きてるんだからいいじゃないか！結果オーライだ！！」

「そういう問題じゃねーだろ！」

怪盗は膝に貼ろうとしていた絆創膏を、傷とも叩いた。

「いつてーなっ！何するんだ！」

「お前にはその位の事したってわかんねーだろーが！」

「何がだ！だいたいなあ、俺はビルの高さとお前の位置を計算してタイミング計って飛んだんだ！万が一にもお前が受け止め損ねることは無いって分かってやったんだよ！」

「だからってやって良い事と悪い事があるだろ！」

「いけねえのかよ！」

「当たり前だ！！！」

二人は額がぶつかりそうな勢いで暫らく睨み合った。そして不意に怪盗が諦めたような息を吐く。

「何だよ、その溜息は」

「お前ってそういう奴だったよなあって思っただけ」

「どーゆー意味だ」

「多分お前にはわかんねーよ」

「何だよそれ」

「それより他はどこも怪我してねえな？」

「ああ、大丈夫。イテッ」

「どうした？」

「ヒジが曲げらんねえ」

探偵は肘を右に左に捻ってみるがやはり途中までしか曲げられない。その腕を怪盗が掴み肘の関節を触診するとやはり関節が外れていた。落下した探偵を掴まえたときに掛かった負荷で外れたのだろう。

「ああ、外れてんな。あんなムチャするからだ」

「そっか。だったらいいや。そのうち入るだろ」

「いいから動くな。蘭ちゃんに見つかったらどうするつもりだ？」

怪盗が何をしたのか分からなかったが、あっという間に肘が曲げられるようになった。特に何の痛みも無い。

「お前ってムダに器用だな」

「それはどうも」

怪盗は救急セットを片付け指を鳴らして消滅させると、ビルの方へ向かって声を掛けた。

「さて、刑事さんたちそろそろ出てきて下さい。と言うよりこのやんちゃな探偵君を引き取ってもらえませんか？それから、もう二度とあんなムチャなマネはしないように十分言い聞かせて頂けると大変助かるのですが」

コツコツと足音が響き、佐藤と高木が建物の影から姿を現す。佐藤は怪盗と一定の距離を置き立ち止まった。

「ごめんなさいね。立ち聞きするつもりは無かったんだけど、出るに出られなくて……。私もあなたの意見に全面的賛成よ。後でじっくりとお説教させてもらうわ」

「ありがとうございます」

高木はコナンの側まで行き、さあ行こう、と手を取る。

「それでは私はこれで」

「待つてよ、キッド」

探偵はマントを翻した怪盗の背に咄嗟に声を掛けてしまった。何か言わなければ。このまま黙って帰してはいけない気がする。

「その・・・助けに来てありがとう。それから迷惑かけてゴメン・・・なさい」

「50点。後の半分は次回までの宿題な」

宿題つて・・・。探偵はのど元まででかかった言葉を飲み込んだ。今度こそ怪盗は翼を広げ空へ飛び立った。探偵と刑事二人はその後姿を何の躊躇いもなく見送った。後で聞いた話では、自分達が到着したときには探偵だけがおり、怪盗は既に飛び立った後だった事にすると佐藤は決めていたらしい。

怪盗の姿が見えなくなると、高木は探偵の目線に合わせてしゃがみ、少し困ったような笑顔で言った。

「ねえコナン君、刑事の僕が言うのもどうかと思うんだけどさ、いい友達だね」

「そうね」

「え？」

「コナン君はさ、頭に血が上ってたから分からなかったと思うけど、彼の声、少し震えてたよ」

って言うても、僕も声だけ聞いてたから分かったんだけどね、と苦笑する。

「彼、本当に怖かったんだと思うんだ。コナン君は信頼していたみたいだけど、人間100%完璧はないだろ？ 掴めなかったら、手が滑って落としたりしたらって思ったら、震えがくと思うよ。僕だ

「つたら泣いちゃうかも」

「そうね。そんな時に『結果オーライ』なんて言われたら力チンと来ちゃうかもね」

「あの・・・、いつからいたの？」

「キッドが『俺に助けを求めるのは・・・』って言ってたあたり」

「全部聞いてたんだね・・・」

「そうかも」

佐藤は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「僕もさ、君が飛び降りたときに体の中がスツと冷たくなって、こう言つのを『肝が冷える』って言うんだなって暢気に思った。そしてたらキッドが現れてコナン君の腕をしっかりと掴んでくれただろ。本当にほっとしたよ。だからさ、本当にもう、みんなが心配するような事をするのは止めよう？ね？」

「うん、ごめんなさい」

「さ、お説教はおしまい。早く蘭ちゃんに無事な姿を見せに行きましょ」

佐藤が歩き出そうとすると、探偵は、ちょっと待って、と言ってポケットを漁りだした。そして出てきたのはフルーツミントの粒ガム。

「佐藤刑事、高木刑事。はい、これ」

探偵は二人の手の平の上にガムを二粒ずつ乗せた。

高木が、ありがとぅ、と素直に受け取る。

「ありがと。で、これは何かしら？」

「うん。口止め料。僕がキッドと仲良しだって事、他のみんなには

内緒にしてね」

（後書き）

「おやつシリーズ」の番外編でした。

最初の予定ではシリーズ内に入るはずだったのですが、下書きのときに、これはちょっと入れられないぞ、と思ってボツになってしまいました。

ところがなんとご感想で「続きを！」と仰ってくださいった方がいらっやいまして、それならばと頑張ってこの話を救済しました。これはもうエピソードの後の話ですね。

怪盗を怒らせた探偵、いかがでしたでしょうか。

期待はずれだった方は、ごめんなさい。

最後までお読みいただきまして、ありがとうございました。

100912

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7347n/>

ガム

2010年10月12日13時38分発行